

比島ミンダナオ島でのこと

匿名（豊田市五ヶ丘在住）

私、七、八才の頃、父の仕事で、ダベオの片田舎で住んどりました。とても平和で四、五ヶ国人と比人と仲良かったのですが、日本軍が米人を追い出し上陸して来てから陰悪になりました。小一の時、教室で全員立てらしてビンタした後で、「天皇」と言った時、気を付けしなかったからと、その先生は兵隊に行って死んだと聞きました。

比人も邦人を嫌がり邦人も片田舎では危なくなり出し殺されたり殺したりの方が有り、邦人の多い町場に集まり出した。そこで母が五人目の子を産み、死にました。父が比人から母乳をもらってはいましたがすぐくれなくなり、ヤギを飼って乳

を搾っていました。それでも父は軍に取られていました。町も空襲で危なくなり皆田舎へと行きますが軍はそれで邦人の男を集め何日も返しません。家は長女九才私七才と下三人の弟（一才の赤子まで）の五人居るので比人を雇うが少女なのですぐ帰られて私ら子供は果物が色々に実っているのを食べていました。

空中戦も無くなりしばらく静かになった。日本空軍全滅し父も空港から十日ぶりに帰っていました。ある早朝家とか地面がゆれる程の砲弾が来るようになり、「それっ」と言って避難するのです。父は病弱の次男を背に貴重品食糧を、姉は一才の四男を、私は毛布、三才の三男は手ぶらで山奥へと兵と共に進みます。兵も弱って歩けない者は道端に個人テントを仲間

に張ってもらい、銃を取られ代わりに自殺用に手榴弾を渡さ

れます。道も段々と狭くなり空には米機が舞っており、兵が居ると敵がサインするとすぐ砲弾が飛んで来て兵が負傷します。

一般人なら撃つて来ませんのです。で、兵もそれを知っており藪から歩き農道に出るのですが一般人も負傷すると誰も助けません。足を大ケガした男性が這って物陰に進むも動かなくなりました。大出血のため。私らもやっと山奥の邦人の所に休ませてもらい、私は縁側に毛布を置き草むらで小便して帰ってみると毛布がないのです。父が奥さんに聞くも知らぬ存せぬです。戻った時奥でダンスを閉める奥さんの姿を一瞬私は見たのですが以来一家は毛布無しです。南国なので特に無しでもいいが雨の時は寒いです。

更に奥へと進みますが、兵を追って銃弾がヒューヒュー飛んで木々がバリバリと折れ倒れます。弾の音がヒューッなら

遠くへヒューンなら近くにと解るようになってました。やつ

と第一キャンプとなる比人が逃げた空き家に着くが、先客二家族と兵が二、三名居り毛布にくるまって居た。兵が私に水筒を差し出し「水を」と云います。が私、生水はいけないとの話を聞いていましたので無視してたら父が「汲んで来てやれや、もう死ぬから」とで近くの小川から汲んであげました。一口飲んで有難うと言って動かなくなりました。死んだのです。で、その夜他の家族らと少しばかりの食事するが兵らは何も無いです。誰も「上げません」、兵も「くれ」とも言いません。朝になってもう誰もいません。すでに先へと進んだのです。で、私らも先へ進みますが空からドンヒューと砲弾が追っかけて来ます。川沿いに移動してる事を知って米軍も撃つて来ます。その砲弾の中私は小川に居た時、近くに落ち大きな音がして

破片が足に当たって水辺にはねてチュンと音がしました。弾がはぜると熱いのだなと気が付きました。

で、そこに空家が有り落ち着き、父は情報を求め外出で居ません。そこへ兵が来て上がり込み奥に有った米を取って下の空家へと。行つて見たら、二人の将校が刀をイスに掛け兵が盗んだ米を炊くのを座って見てました。夕暮れ近くそこへ別な兵三人が来ました。その時一人の兵が「斥候に行け」と言っただらしく、兵が大きな声で泣きながら「今ケガして来たのに何でわしばかりが」と言っていました、やがてさとされて静かになり翌早朝すでに空でした。先へ行ったのです。

で私らも先へ進み、大きな川べりの空家へ落ち着きました。近くで子供の声がし、行つてみたら五、六才位兄弟らしきがキヤッキヤツと遊んでました。で、その夜その家の方から大きな

子供の泣き声がしてやみ、又大声がしました。そしたら父が「殺してるな」と言いました。翌朝見に行った。小さな土盛り二つ有り、家は空で親は足手まといを始末して行つたのです。それから又物すごい空爆があり、次男と四男がショック死しました。で父と私で焼畑に一升位のコインと共に埋めて次へ進みます。片流れの山道の有る小屋に落ち着き、もう空襲も砲も来ない静かです。日本軍の反撃が無くなったのでしょう。何日かした時、兵が来て上がり込み父と知人の男と兵が口論し、ドスツと音がして知人の男が生息引をし出しました。私は床下で人間て何であんなに簡単に死ぬんだろうと思いました。兵は米を取って去りました。で、知人の男は「死んだふりをしたのだ」と言いました。翌日裏の焼畑の方で銃声がしたので父が見に行き昨日の兵が殺されていたとのこと。

又ある日ロバを父が捕え連れてたら兵が射殺して解体されました。それからもつと奥へと進み父は「腰痛で動けないからここで永住する」と言つて大き目の小屋へ着きました。三、四日過ぎた頃、男七人女四人のインディアンが来て「もう戦争は終わったから帰りなさい」と父に話しました。「明日イカダで送つてあげるから」と夕方でしたので姉が土間でお粥を炊く準備してたら「もう明日帰るのだから米を全部炊きなさい」と言うので姉が残り少ない米を全部釜に入れました。私も木をくべたりで二人で炊いてました。しばらくして男が来て釜に指を入れ米粒の煮え具合を見て仲間にまだと首を横に、しばらくして又やり、OKと仲間に。そしたら他の男達が床の丸太をはがし出してバット状にし出し、父が「何をするん」と言つたら「火にくべるのだ」と言い近づいて来て、いきなり私の頭と

背を撲られ気絶しました。連中が去る時火を消すためまぜくつた火のかけらが私の足に当たり、気付いて頭に手を当てる後で平に感じ出血してました。父が床で痛い痛い悲鳴を上げており、私が歩けないので這って行き見たら額を切られ目はくぼんで血がたまり動けないで苦しんでるが私もあまり動けずどうすることもできません。三才の三男が小さな消えそうな声で床に上げてと。私は這いながら行き土間に倒れている弟を抱え上げようとしたが力が無く気を失ってしまい二日位、弟の傷に死体虫が死汁を引きながら動いていた。南国は腐敗も早いのです。で、父を見たら絶えてました。で姉が「頭が痛い痛い」と言いながら目覚めて頭を見たらふくらんでる内出血です。

襲われてから何日過ぎたか判らないが、おばさんが一人で

通りかかり、「あんたらどうしたん、戦争終わったんよ。帰らんの」と歌を唄いながら行つてしまいました。私ら、保護者がいきなり居なくなりどうしていいか判らないが、来たほうへ歩きだし姉も付いて来ます。焼畑を登り頂上の広い道に出て来た方へと進みます。道の左右に大きな爆弾砲弾の穴が有り回りに服のまま白骨になり家族の写真がバツ散らかれて方々に有ります。元気な兵がさぼくるのです。一日目は来る時の小屋に着きもう暗いので寝たいが、初めて食欲を感じる。が何も無いです。姉が初めて言葉を発しました。「食べたい、頭が痛い」と。二人とも水も飲んでません！

翌朝焼畑トウモロコシが植えてある所を通り、実を見るもゴマ粒位で食べられないです。更に進むと道端の小屋でおじさんとおばさんがやかんで炊いたご飯を食べてます。近づい

たら「あんたらも食べなさい」と湯のみについでくれました。何日ぶりの食べ物でもう少し欲しいけど、人にもらうことの習慣も無く捨て猫の子同然ですから。父は裕福だったのでもらうことはまず無かったから。何日も食べずにいると、食べる力が無くなりそのまま体力を失って終わるのだと子供心に思っていました。

更に進み夜になり、道に家らしき物は無いです。有っても先客有りです。疲れ果て木陰に転がり込んで寝込みます。朝、山鳥の声で目覚め手に固い物を感じ見ると軍服を着た骸骨です。横に刀が有ったので将校です。怖くもなんとも思いません。それだけ心も疲弊しとるのです。やがて道半ばの橋の無い大川に流されそうになりながら来た所です。なつかしいです。回りにも目をやると、破れ軍服の疲労しきった兵やら邦人がばら

ばら見当たり、対岸に目をやるとジープが居り邦人二、三家族を点検しています。こちら川下から二人の日本兵が出て来ました。そしたら対岸の米兵が機銃をこちらに向けました。ああーもうこれで終わりと思い逃げる事もできず凍り付き、立ったままで見えますと撃ってきません。兵に目をやると三人座りこんでがさごそ動いてる。やっと一人が日本刀に白っぽいボロ切れを付けて立ちました。降伏です。対岸から米兵が来て武装解除です。ほっとして対岸に渡りました。子供だから点検はしないです。あの三人の兵、一人は将校、二人は兵。普通降伏せず自決が多い中、あの将校立派と子供ながらに思いました。二、三十人の人の中、子供が少なかった。トラックに乗りキャンプに向かう途中広場を見ると、十字架が見渡す限り有り米軍も沢山死んでるんだと思いました。

天皇の名の元に！ドイツ、イタリアは責任を取らされとる。キャンプは女子供と大人の男は別で姉が「コインを返すように行ってこい」と言います。でその弟の墓から持ち去った男は山口県の小林と言う父の知人です。「返してくれ」と言う「日本に帰ってから返す」と言って返さないのです。コイン百枚位を。一枚でキャンプに売りに来る人からバナナ一房買っているのです。ある夜バババーンと銃声がし、皆凍り付きました。皆殺しされると。翌朝、脱走者が撃たれたと聞きました。キャンプで「食べ物、米がいいかパンがいいか」と好みまで聞く程、米軍は大事にしてくれ頭が下がりました。

(続く。——日本に着いてから大変です。)

(参考) フィリピン ミンダナオ島
(ウキペディアより抜粋)



日本との関係

ミンダナオ島、とりわけダバオは日本との関係が深い。19世紀末にアメリカ人によって開かれたマニラ麻の農園作業に応募した移民がさきがけだった。1903年ごろのルソン島でのバギオへ至る高原道路建設では数千人の日本人労働者が厳しい工事に従事し、工事の後はミンダナオ島へ機会を求めて多くの人が移動した。

こうした中、太田恭三郎を筆頭に、マニラ麻農園を買収したり開設したりする日本人農園経営者が多く現れ、彼らは農場から工場まで一貫した施設を建設したため、小さな町だったダバオは大都市へと飛躍的に発展し、第二次世界大戦前まで

は10万人近い人口を有する東南アジア最大の日本人コミュニティを形成していた。中でも沖縄出身者が1割を占めていたとされる。だが太平洋戦争末期のミンダナオ島の戦いで兵士のみならず日本民間人も含む数万人が戦闘や病死、餓死で犠牲になった。戦後もダバオを始めミンダナオ島には多くの日系人がいるが、戦後にその証拠を紛失してしまったため日系人であることを証明できない日系移民が数多くいる。